

児童の説明文産出における「読み手意識」表現の発達

辻 義人
(小樽商科大学)

岸 学
(東京学芸大学)

本田千絵#
(横浜市立岡岡小学校)

近年、教育場面では、自分の考えを文章でわかりやすく表現する能力が注目されている。この能力は、文章の読み手に対して何らかの知識を伝達することを目的とした、説明文産出能力と捉えられよう。ここで、わかりやすい説明文産出の条件として、岸・綿井(1997)は、書き手が十分な知識を持つこと、聞き手の知識状態を理解すること、これらの2点を挙げている。

本研究では、小学生の「読み手意識」への配慮に注目する。研究Ⅰでは、学年進行に伴う文章表現の変化の検討を行う。研究Ⅱでは、児童の読み手意識に関するメタ認知的知識と、文章構造・わかりやすさ・説明内容の正確さ、これらの関連について検討する。

【 方法 】

(1) 校内案内文作成課題と評定

Y市立小学校2～6年生の239名に、校内案内文を作成させた。読み手として成人を想定する場合と幼児を想定する場合を設定し、児童はどちらか一方の作業を行った。大学生6名が、回答のわかりやすさ、正確性の評定を行った。また、読み手を配慮した文章表現の分類区分を作成した。

(2) メタ認知的知識の測定

同校4～6年生の147名を対象に、「メタ認知的知識質問紙(崎濱, 2003)」改訂版を用いた調査を実施した。なお、調査対象に合わせて表記の一部を変更した。確認的因子分析の結果、①伝わりやすさ、②読み手の興味・関心、③簡潔性、④表記、⑤プランニング、上記の5因子が確認された。

【 結果と考察 】

研究Ⅰ：学年の進行に伴う文章表現の変化

学年間において、児童の産出する文章にどのような違いが見られるのだろうか。児童の産出文章から、読み手を意識した表現の出現率、ならびに、文章のわかりやすさ、これらの学年間比較を行った。

読み手を意識した表現の出現率については、全学年間に有意な差が認められた。ただし、想定した読み手によって出現率が異なった。成人を対象とした場合、4年生まで増加し、それ以降は減少する傾向が見られた。また、幼児を対象とした場合、2年生から6年生にかけて増加する傾向が見られた。特に「結果の明示(××を曲がると〇〇です、など)」の出現率を図1に示す。この結果は、4年生以上の児童は、読み手であ

る成人の読解能力を十分なものと推測していること、また、そのために読み手の読解能力を意識した表現が減少したことを反映したものと考えられる。次に、各学年間における文章のわかりやすさの分析を行った。その結果、どちらの読み手を想定した場合にも主効果が認められ、6年生の文章がもっともわかりやすいことが示された。

これらの結果より、学年の進行にともない読み手に対する配慮が変化することが示唆された。特に、6年生は聞き手に合わせた表現が可能であり、わかりやすい説明が可能であることが予想される。

研究Ⅱ：読み手意識に関するメタ認知的知識の効果

児童のメタ認知的知識に注目し、高群と低群の比較を行った。第一に、メタ認知の程度と文章構造との関連に注目する。メタ認知高群の児童は、成人を対象としたとき、「結果の明示」と「否定の明示(△△は曲がりません、など)」の記述が多く見られた。また、幼児を対象としたとき、修辭内容がより丁寧であることが示された。第二に、わかりやすさとの関連に注目すると、いずれの読み手に対しても、メタ認知高群の「伝わりやすさ」と「読み手の興味・関心」成績が高いことが示された。第三に、説明内容の正確さとの関連に注目すると、いずれの読み手においても、ほとんどの因子間に違いは見られなかった。なお、この理由として、課題が容易であったことが考えられる。

【 結論 】

児童の読み手意識は学年進行に伴い変化することが示された。また、メタ認知高群の児童は、読み手に合わせた表現を用いており、わかりやすい説明文の産出が可能である。このことから、説明文の指導においては、メタ認知的知識を与えることが効果的であると考えられる。

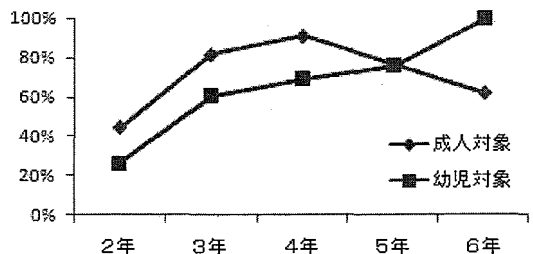


図1 読み手を意識した表現(結果明示)の出現頻度